

## 多文化クラスにおける学びのモデル：関係構築と文化スキーマ理論に着目して

藤, 美帆

<http://hdl.handle.net/2324/1440995>

---

出版情報：Kyushu University, 2013, 博士（比較社会文化）, 課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (4)



## 論文審査等の結果の要旨

本研究は多文化クラス（様々な背景をもった学生が参加し、ディスカッションやグループアクティビティをとおして、異文化理解教育を行うクラス）において、日本人学生と留学生の関係構築の観点から、そこで得られる学びのプロセスを明らかにした実証研究である。多文化クラスは、1990年代以降「日本事情」の一形態として実施されてきたが、定められた指針がなく、「どのような力を育成しようとするのか」に関する議論が不十分であると指摘されている。そこで、本研究はクラスデザインに資する示唆を得ることを目指し、九州大学での実践を事例として、多文化クラスにおける学びのプロセスの理論化を試みている。

第1章では、多文化クラスにおける日本人学生と留学生の関係構築に関する研究は、授業終了直後の一時的な状況の報告に留まっており、そのため、「多文化クラスにおける学びは、どのような過程を経て得られているのか」、そして、「それが受講生の関係構築にどのように反映しているのか」については明らかではないことを問題として指摘している。

第2章では、留学生と日本人学生との親密な友人関係構築が、困難と必要性を同時に抱える両義的な問題であるだけに教育的介入に対する社会的要請が高まっている点を指摘している。

第3章では、本研究が依拠する理論的枠組み、質的分析に関する立場、用語の整理を行い、第4章ではデータのフィールドの特性を述べている。

第5章と第6章では、【研究1・2】として、多文化クラスでの学びや経験を明らかにするために、多文化クラス受講一定期間を経た日本人学生と留学生を対象としたインタビュー調査を行っている。その結果、従来は、多文化クラスで構築した受講生同士の関係性が受講後一定期間を経ても持続し、発展を遂げていくことが期待されてきたが、本研究の結果からは、受講生は多文化クラスで得た学びを生かし、日常的にかかわる周囲の人々との異文化交流の輪を広げていることが確認された。特に、留学生は日本人と交流するうえで必要な文化スキーマ（ある国・地域に生まれ育ったものが、長期記憶として獲得する、その国・地域で生活していく上で必要な様々な知識・情報）に触れ、それが日常的にかかわる周囲の日本人学生との交流の円滑化につながっていることが示唆された。これは、多文化クラスを受講した成員同士の関係性が深まるという先行研究での指摘とは異なる新たな視点である。

そこで、第7章では【研究3】として、多文化クラスのグループ活動ではどのような話題が多く出現するのかについて調査している。分析の結果、特定のディスカッションの課題を与えた場合、文化スキーマにかかわる話題を含む共通話題項目が多く出現し、留学生が文化スキーマ獲得に寄与する話題に触れていることが確認された。

それを踏まえ、第8章の【研究4】ではそうした学びに至る過程を明らかにするために、文化スキーマ獲得に寄与する話題はどのような会話の流れの中で出現するのかについて調査している。分析の結果、「過去のエピソードを紹介する文脈で文化スキーマに寄与する話題が出現する」という傾向が確認された。そして、日本人学生にも同様の結果が得られ、日本人学生と留学生の双方に文化スキーマにかかわる学びが得られていることが示された。

第9章では、これらの研究結果をまとめ、本研究が事例としてとりあげた実践における学びのモデルを提示している。モデルでは、「安心感」との相互作用によって「異文化間コミュニケーション」が活性化し、それによって「意識変容」と「文化スキーマ獲得」という学びがもたらされる。そして、それが日本人学生と留学生との意識を隔てている「垣根の低下」や「常識のズレを埋める」ことに寄与し、「日本人学生と留学生の関係構築」につながっていることが示された。ここで

得られた示唆として、本研究では「異文化間コミュニケーションの活性化」を促すことを多文化クラスのクラスデザインにおける一つの指針として提案している。

本論文は多文化クラスの学びのプロセスを丁寧に分析し、日本人学生と留学生双方の関係性構築に寄与する要素を具体的に掘り下げ、学びのモデルとして提示しており、その点が異文化間コミュニケーションの活性化のしくみ解明に資する業績として評価される。以上の点から、調査委員会は本論文が博士（比較社会文化）の学位を授与するにふさわしいと判断した。

試験又は学力確認の結果の要旨

甲 第 号 氏 名 藤 美 帆

調査委員  
主査 松永 典子  
副査 井上 奈良彦  
副査 志水 俊広  
副査 高松 里  
副査 田中 共子

試験又は学力確認の結果の要旨

2014年2月6日午後1時より3時まで、九州大学伊都キャンパス比較社会文化・言語文化研究教育棟419室（第8セミナー室）において、藤美帆氏の博士論文公開審査を開催した。最初に申請者が主論文の概要を説明し、続いて、質疑応答が行われた。申請者は質問に対し、的確に回答し、説明を補足した。

以上の公開審査の結果に基づき、申請者は博士（比較社会文化）の学位を授与されるものとして十分な学力を有すると判断された。よって、調査委員全員一致で申請者が最終試験に合格したものと認定した。